



電波時代の到来

全日本テレビサービス会長
前NHK副会長

藤島克己氏



東京は久しぶりの小春日和という日に、全日本テレビサービス会長の藤島克己さんを会長室に訪ねた。

ワイシャツ姿で「私みたいな者で用が足りませんか。」と言いながら、インタビュアーに応じる気さくさ。

小学校五年の時、「自宅に電気がついたことにショックを受けたのが、電気に関係する仕事に関心をもったはじまりだった。」また、「現在のよ

うな情報過多時代には、マスコミ全体がき然とした態度で材料をよくこなし、迅速正確な報道をすべきだ。」と熱っぽく語る。

「電気ショック」

上益城郡矢部町の出身なんです。矢部町と言っても、私たちの頃は上益城郡御嶽村川野と言って、浜町から馬見原(阿蘇郡蘇陽町)の方へ二里位行った所でして、今の人たちに話しても、とても信じてもらえないような辺りな所でしたよ。しかし、妹が浜町に健在なのと、家屋敷がまだ残っていますもので年に一、二回帰るんですが、今は道路なども整備され

通っていましたが二日ばかりで一往復してしまいましたよ。それで中学生なんかとても、客馬車に乗れるものではなかったですよ。

気持ちとしては、笈を置いて郷関を出ずの心境でしたよ。志を立てた若い青年が、笈の中に書物やら着物を一ぱいつめて郷関を出て都にのぼって勉強するとう意味でしょうが、まさにそういう感じ

で中学に入ったものですよ。学校はかなり厳しいスパルタ式だったですよ。今、考えてみると校長先生はじめ立派な先生たちでしたね。すごく厳しかったけど。

寄宿舎の生活が中心になりますよ、私

んが、電気がなかったんですよ。ランプ生活なんです。ランプ掃除なんていうのは、子供の義務みたいになってしまっ

てねえ。ガラスのホヤというやつをふかさないではいかんわけで、上手になるまでにはかなりかかったものですよ。それが小学五年生のときですよ。大正十年頃ですかね、やっと電気がつきましてね。子供ごろに「電気ショック」といいますか、大変な文化的ショックを受けたんですよ。これがね、今から思えば私が電気やになった因縁じゃないかと思うんです。ようするに、電気というのは、便利なものだなあと思ったわけですよ。ランプそのほか雑務からは解放されて子供心にほっとしたものでした。

鉄は熱いうちに鍛え

中学は御船中学の二回生なんです、当時中学は熊本市内に四、五校で、郡部となると各郡に二校あるかないかでしたよ。それで中学に入るとなると大変なんです。矢部の御嶽村から通学はもろんできないでしょう。二十五キロメートル位ありますからね。一年中、寄宿舎にほうりこまれて夏休みや冬休み以外は帰れないわけですよ。また帰るといっても、バスなんてないし、ゲタをはいて山越えして帰っていました。六、七時間かかってました。

熊本矢部間の交通機関なんていうのは、荷馬車が何台かと、客の馬車が一台

は二回生だから、上級生がいるわけですよ、この上級生下級生の序列がやかましかったですね。

日曜日だけです。外出できるのは、それで夜十時になると消灯するわけなんです、電気を消してから上級生が言うんですよ。「オイ、豆買ってきて。」と。怖いけどしかたがない。へいを乗り越えて町に買いに行ったものです。舎監に見つかれば大変なことになるわけです、規則違反だから。しかし、上級生はもっと怖い。(笑い)

寄宿舎では冬でも五時半起床なんですからね。まだ暗いですよ。それが全員裸になって、風呂場で水をかぶるんです

よ、それから運動場に整列させられ、運動場を五、六回走らされてから朝食なんです。そりゃもう、今の子供たちの想像を絶するものがありましたよ。

今考えてみると、五年間毎朝水をかぶらされたということがきいてるんだと思うんです。風邪をひいたことがない、やはり鉄は熱いうちにきたえよですか。

困ったことと言えば、手紙が来るとみんな舎監室に行くわけです。舎監にしてみればラブレターかどうかはすぐわかるわけです。いくら当時でも信書の秘密を舎監がかってにやぶって読んだりはしなかった。そのかわり呼びつけて、手紙を目の前で開けて読めというんですよ。それでボソボソと小さな声で、「月が青く照っています。」なんて読んでると、「声が小さい。もっと大きな声で読め。」なんてハッパかけられて、みんな先生の前で大きな声で読んだものですよ。(笑い)

NHKに入局

中学を卒業して昭和四年の四月、電気的文化的ショックがあるものだから、熊本高等工業学校電気工学科に入り、電気を勉強し、昭和七年の三月卒業したわけです。この頃の日本は、軍事面、経済面においても暗い世相の時代でしたからね。満州事変、上海事変と続

き、血盟団事件、五・一五事件等がありましたし、昭和四年のニューヨークの株式の大暴落に始まる世界的恐慌のピークが昭和六年頃でしたからね。それで就職先がほとんどなかったですよ。私なんか、おばあちゃんがいて遠くに行くのが、なんて言うのもで熊本に残り、NHKの清水の放送所に入ったわけですよ。なんとはなしに入ったと言っちゃ語弊がありますが、電気ショックがあるものだから、多少の電気に対するあこがれがあったんですよ。また、熊本にはNHK、あるいは熊本電気会社か、水俣のチッソ肥料位しか就職先がなかったんですよ。それで、昭和七年の四月、熊本清水放送所を尋ねたところ、「あ、いいよ。採用するよ。」と言われるものだから入ったんですよ。試験もなんにもないんですよ。学歴さえあればね、良かったわけですよ。ところがね、「いいよ。」と言っただけで、いつまでたっても採用通知をくれないんですよ。結局こっちにしてみればそこを逃しちゃうと就職するところがないものだから、いくら無茶だと思っても毎日弁当きで、ただ働きで清水まで通ったんですよ。私みたいな人もう一人いましたよ。そして、十一月七日になって「やっと君たちを採用する予算がついたから採用するよ。」という話があったんですよ。ところがね、採用するにあたって相談があるという訳ですよ。というのが、予算が一人前しかつかなか